

パネル

西川如見『増補華夷通商考』（一七八〇年刊）

いずれも地理的知識の披露Ⅱイスラームの思想には寡黙

江戸時代の蘭学Ⅱユダヤ、キリスト、イスラームなどの宗教研究は含まず

幕末から、洋学（英語などによる学問）が導入Ⅱ宗教は無視
中東を経由して西欧諸国と往復した日本人Ⅱイスラームには
無頓着

明治初期から大正Ⅱムハンマド伝の執筆

林董訳述『マホメット伝』（明治九年、一八七六年）

英語の本『詐欺師マホメット』の翻訳

以後は英雄・英傑マホメット

日本人ムスリムの誕生とメッカ巡礼Ⅱ思想的な裏づけは希薄

一九〇二年ごろ山田寅次郎（トルコ）と有賀文八郎（インド）

山岡光太郎が一九〇九年にメッカ巡礼

日露戦争と汎イスラーム主義Ⅱ日本への期待とイスラームの日本への布教

アブデュルレシト・イブラヒム（一九〇九年来日）Ⅱ政治目的が主

日本のアジア主義（大アジア主義）者と意見交換

三三年に再来日、三八年に東京モスクⅡイスラームへの知的

関心Ⅱ井筒俊彦、前嶋信次

大東（大東亜）と回教（イスラーム）問題

大東（大アジア）の地理的範囲Ⅱ中東までを視野に入れた人
もいる

満州事変から支那事変へⅡ北支の回教徒対策Ⅱ南進論の台頭

Ⅱ南洋の回教徒

外務省調査局『回教事情』

大日本回教協会『回教世界』

林銑十郎理事長Ⅱ陸軍の工作機関とみなされる

戦後の日本イスラム協会『イスラム世界』

東亜経済研究所『新亜細亜』Ⅱ大川周明Ⅱ満鉄

回教圏研究所『回教圏』Ⅱ大久保幸次Ⅱ蒙疆協会

本格的な思想研究は少ないⅡトルコ語とペルシア語が中心
で、アラビア語は不足

戦後に雑誌は復刻

大川周明と『回教概論』

アラビア語の知識には疑問符がつく

研究者の姿勢と戦後Ⅱ大部分の研究者は他分野に転向

数名を除いて、戦後は別な世代が研究を担う

パネルの主旨とまとめ

星野英紀

戦前日本における海外諸宗教の研究は、戦前の国家政策と直接的に関係していた面も多く、戦後、厳しい批判を受けることになった。しかし、戦前のすべての海外宗教研究を一括りに否定的評価を下すことはできないのではないか。六〇年以上が経過した今日、戦前における海外宗教研究の意義を改めて虚心坦

懐に検討することは、今後の斯界の発展にも十分な意義を持つものと確信し、「戦前までの日本における諸宗教研究の現在の意義」と題する、このパネルを開催した。発表者の四名とそのタイトルは次の通りである。

菊地章太「戦前日本における中国宗教研究」

下田正弘「戦前日本における仏教研究」

芦名定道「戦前日本におけるキリスト教研究」

後藤 明「戦前日本におけるイスラーム研究」

菊地氏の発表では、戦前において中国は日本の植民地であったので、現地調査がかなり広範に可能であったことがまず指摘された。しかし戦後は日中間の国家体制の違いもあって、フィールドワークが極めて困難になるという、中国研究独特の事情があった。中国仏教については、日本仏教との深い繋がりのもと、長い歴史を持っている。中国仏教研究者には僧職に就いている者も大勢いる。しかし道教研究においては日本には道士もいるわけではないし、日本文化との関係についてはその浅深についていまだ議論のあるところである。儒教は日本では少なくとも宗教として受容されてこなかったものであり、日本では儒教が宗教であるという視点が出来にくく、これも今後の日本における儒教研究の課題である。

つぎに下田氏によれば、神仏分離、西欧思想の流入、インド学としての仏教学の輸入ということが日本の伝統的仏教学の姿を大きく変えることになった。そのため、戦前の仏教学は、インド仏教文献による研究、理論的仏教研究の樹立などを通して、仏教の全体像の確立が大きな特徴となった。それが戦後に

なると、研究対象が仏教全体というよりも部分化して個別化する方向が見られる。さらに文化現象としての仏教の研究も盛んになった。また中村元仏教学、平川彰仏教学のように個人名を冠する仏教学が確立したのもまた特徴である。今後は個別的研究と仏教全体の研究との調和、信仰者と研究者との立場の明確化などが課題として残っている。

芦名氏は近代日本キリスト教研究の戦前期を主に第一世代と第二世代とに分けた。第一世代は明治期キリスト者たちであり、かれらは研究者でもあったが当時の社会に強い発言力を持つキリスト者であった。第二世代は、大正期から昭和期に活躍したキリスト教研究者である。もちろん第一世代の土台を継承してのことであるが、第二世代において研究らしい深みがある成果に顕れるようになった。戦中の評価については様々な立場もあるが、戦前が基盤になって、戦後のキリスト教研究が発展したことは否めない事実である。

イスラームについて後藤氏は、明治初期以降次第に日本でイスラーム研究の萌芽が見られるという。しかしそれは厳密な学問的営みとまではいえない。しかし、その後大正期になり、アジアからのイスラーム教徒が来日し、日本にイスラームへの関心、イスラーム研究の足場を築くようになる。そこから、井筒俊彦、前嶋信次などが排出される。日本の軍事的拡張とイスラーム研究は関連しているが、そのなかから戦後のイスラームの土台となるような研究も生まれている。しかし、アラビア語に依拠した本格的イスラーム研究はまれである。

(本パネルは日本宗教研究諸学会連合との共催で行われた。)